

『夜の寢覚』の女一宮

— 降嫁した内親王の問題として —

高橋由記*

はじめに

史実において降嫁した内親王は少ない⁽¹⁾。しかし物語における内親王はしばしば降嫁し、重要な登場人物のひとりとして描かれることが多い。なかでも『無名草子』に「女一の宮の御心用ゐ、ありさまこそめでたけれ⁽²⁾」と評された『夜の寢覚』の朱雀院女一宮(以下、女一宮)は男主人公(以下、男君)に降嫁したが、その存在に女主人公寢覚上(以下、女君)は懊悩を深める。第三部⁽³⁾にみられる女君の長大な心理描写は、女一宮の存在に因るところが大きい。

女一宮は大皇宮所生の朱雀院皇女で、帝の同母(姉)妹にあたる。第二部で初めて登場し、男君に降嫁した。男君の妻だった大君は衝撃を受け、女児(小姫君)⁽⁴⁾を産んでもなく没したらしい。しかし、この降嫁が物語内に及ぼした影響はそれだけではない。野口元大氏が巻三の冒

頭部分を挙げられて、女君にとって「男君との間の愛の歴史が、「過ぎにしかた」と「今」とに二分される形で意識され、その境目が女一宮との結婚なのである。この事件が、彼女にとってどれほどの衝撃であったか、これによってもうかがえよう」と述べられたように⁽⁵⁾、女一宮の存在は女君にとっても看過できないものだった。改作本『夜寢覚物語』が原作から大きく離れるのは降嫁問題からで、女一宮は齋院に卜定されて降嫁は不成立となり、最終的には大団円となる。つまり、女一宮の降嫁を回避しなければ改作本の目指す幸福な結末が迎えられないほどに、原作の第三部・第四部における女一宮の存在が、女君にとって苦悩の要因となっていたのである。

では実際に、女一宮はどのような存在として物語に描かれているのだろうか。本論は、女一宮が物語の要請に従って存在感を増していった過程と意義を検討することを目的とする⁽⁶⁾。

一 皇女の降嫁

「皇女たちよりほかは、この人(太政大臣女)こそやんごとなかるべきよすがなれ(巻一・22)」⁽⁷⁾と、物語に紹介された当初から男君の妻として皇女は候補に挙がっていた。男君は大君と結婚するが、第二部で女一宮降嫁が実現する。皇女降嫁はそれほど例のあることではなく、史実においては皇女独身主義はほぼ守られており、皇女を室としたのは藤原氏北家源氏出身の少数の貴族だけであった⁽⁸⁾。物語においても同様で、主人公をはじめとする、限られた人物だけが皇女を室としていることが指摘出来る。

後藤祥子氏は、皇女の降嫁には「父帝の強力な意志のもとで、きわめ

て政策的に取り運ばれる、花婿にとって栄光の降嫁」と「父帝の意向とほとんど無関係に、皇女の人物本位で秘かに行なわれる結婚」とがあり、「柏木にとっての理想が前者であったとするなら、夕霧と落葉宮の結びつきは（中略）まさに後者の典型」とされた¹⁰⁾。史実でも、帝や院による裁可のあった降嫁と、臣下側からの積極的な働きかけで実質的な結婚が成立したものと大別される¹¹⁾。しかし『狭衣物語』における一品宮の狭衣への降嫁や、『夜の寢覚』にみる女一宮の男君への降嫁はそのどちらでもない。『狭衣物語』の場合、無実の噂が降嫁に繋がったし、『夜の寢覚』では男君・女一宮の母大皇宮双方が望んだらしい。

女一宮が降嫁に至った経緯は第二部にあり詳細は不明である。第三部に残る叙述から推定すると、女君が老閨白と結婚したことで失意にあった男君が「女君ヲ」片時も思ひ怠らず、胸、心やすからずのみ思ひたまへられしが苦しさに、ことと慰むこともやと、あやしきまでまめになりおきはべりにし心を改めて、朱雀院の宮の御事も思ひ寄りにし（巻五・455）と女一宮に近づき¹²⁾、女一宮方も、大皇宮が「あの姉（＝大君）は、もとより心ざし深からず、ありつかずと聞きはべりしかばこそ（巻三・265）」と、男君と大君の結婚が上手くいっていない噂があることに加え、「〔女一宮ヲ〕世づいたるさまにて見たてまつらむ」と思ひかけ（巻四・385）て降嫁を許したらしい。

『源氏物語』の朱雀院が「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやう（若菜上・④32¹³⁾）」と感慨し、また史実でも皇女降嫁の少ないことを考えれば、大皇宮が女一宮を「世づいたるさまにて見ようとしたのは特異といえる。大皇宮は「もの遠くはおはしませず、いとけ近う、わららかにのみおはします（巻三・250）」・「軽らかに登花殿に渡り通ひ（巻三・264）」と記され、大らかで慣例に柔軟だったよう

ある。そうした大皇宮の性質が女一宮降嫁を可能にした遠因だった可能性もある。『源氏物語』の朱雀院が続けて、「すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず（若菜上・④33）」と、降嫁後の内親王自身の幸不幸を考慮しなかったことと比べるとき、女一宮の幸せのために形振り構わず行動する大皇宮とが根本的に異質であることは、より一層明らかになる。

ところで、女一宮が降嫁したとき、父院・母后は在世中で、同母の兄帝は在位中であつた¹⁴⁾。そのような女一宮の降嫁に男君の妻だった大君は衝撃を受け、降嫁が原因で没したらしい¹⁵⁾。内親王降嫁は、男性貴族にとっては貴族社会における自身の優位性を示すことに繋がるが、並べられる妻の立場からすれば、耐え難い苦悩を与えるものとなる。この苦悩が、第三部以降の女君の苦悩となっていくのである。

二 「やむごとない女一宮と、「劣りさま」の女君

女一宮は第三部において「やむごとない存在としてしばしば語られる。それは同時に、女君が「劣りさま」であることに繋がるが、源太政大臣女である女君は、今までおのれを「劣りさま」と卑下したことはなかったのではないか。女君自身、

「昔より今に、目やすからず、つゆばかり心にくき思ひやりなくのみある、身の有様かな。ものの心を思ひ知りしより、『何事も、などてか人に劣らむ。いかで、いみじう重りかに、恥づかしく、人にすぐれても、ただなる世に過こいてばや』とのみ思ひおごりしものを。幸ひなどいふことこそ、心およばぬかたにて、思はずにもあら

め、ただ我が身の有様ばかりだに、思ひしにあらざ、昔よりけしからず、あはつけく、軽々しう、憂きものに、人に言ひそしらるるを事にて、やみぬべかめるよ」と、尽きせず悲しう思ひ入るに（以下略）（巻四・322）

と回想しているように、昔から誇り高く、人に劣ることを良しとしていなかったことが記される。野口元大氏が改作本を参考にしつつ「相手が女一宮となると、これはもう男君が心を奪われるのは当然のことと意識されている。このことは（中略）彼女が本来的にもっていた至尊の血に對する崇敬の感情に帰せられると見てよいのではなからうか」と述べられたように、内親王は絶対なのである。大皇宮は「男君ノ女君へ」昔よりの本意深しといふとも、宮に並べたてまつらむことは、いとあさましかるべくなむ（巻三・265）」と、女一宮が女君と並べられることに憤るが、内親王と比べられることをよしとしないのは、むしろ女君の方だったのではないかと思われる。帝に闖入された女君は、男君のことを思つて靡かないが、

なにし、やむごとなき基を見ながら、我はこよなき劣りざまにて、交じらむかたをこそ、すべてあるまじきことにも、あながちにもかけ離れつつ、恨みらるれ。それよりほかに、つゆも怠りありて、聞き疎まれむな。（巻三・273）

と、女君が男君を避けるのは、女一宮という「やむごとなき基」に比した「劣りざま」の自身を忌避したからであり、それ以外の理由で男君に疎まれるのを厭うことが語られる。さらに、危機の時には真っ先に思い浮かぶのは男君だったと、女君が自身の内奥を知る場面でも、
今となりて、はた、いとやんごとなく、さばかり恐ろしきさまに定まりたまひたるを、我はなにの頼もしげある身の際にてもあらで、

今さらに靡き寄り、憂しともつらしとも、まだならはぬかたの恨みをさへ添へて、思ひ尽くさせむと、（巻三・289）

と、自身が女一宮よりも劣っていることを感じている。帝は女君を「げに、人の程、かたがたにいとやんごとなし（巻三・276）」と認識し、兄権大納言も女君を「我が御身、一世の源氏、近き帝の御孫、前の関白左大臣の上（巻三・307）」と評していた。父太政大臣は出家してしまっているとはいえ在世中で、兄弟は健在、なおかつ自身も故関白の室という社会的地位を持つ女君は、世間的に見れば「人の御程やむごとなくのみもてなされ（巻四・411）」ている。しかし、比較の対象が内親王となると「頼もしげある身の際」でないと感じざるをえない。一世源氏と帥宮女の娘として、おそらくは血統の尊さを自負していたであろう女君にとって、自らを「劣りざま」と認識せざるを得ない、絶対的な相手が后宮腹内親王なのである。女君の類稀れる美質をもってしても、その劣性は終生変わることがない。

一方、帝闖入事件をきっかけに女君と久しぶりの逢瀬の機会を持った男君は、「夢の心地して、命うれしきを、またかたはらに分くる心あるべくもあらず、しばし横目堪へがたかべき（巻四・333）」状態で、女一宮との結婚を「なぞせしわざぞ（巻四・333）」と後悔する。帝闖入が大皇宮の奸計だったと察したときには、「終の我が世のつまりとは、これ（女君）こそあれ。宮と申すとも、あぢきなや、たちまさりて、もてないたてまつるべきことかは（巻三・304）」と、女君への愛情が勝ることを感じている。男君が女一宮を丁重に扱うのは「人目ばかり心を分けむことの、いとわりなく（巻四・334）」とあるように、もっぱら世間体のためであって、心が惹くのはあくまでも女君という姿勢を崩していない。ここまですべてにおいて、女一宮本人は全く登場しておらず、人間性はさ

ほどの意味を持っていなかった。そのことは、現存部分で初めて女一宮が詳しく述べられる場面からも見て取れる。

御帳のうちに入りたまひて、うちやすみたまふに、これを、悪うおはしますとおほゆるにはあらず、気高く、きよらかに、うるはしう、あてなる御けはひ、有様、「かうこそは、帝の御女はおはすべけれ」と、限りなく見たてまつり（巻四・342）

男君は女一宮の「御けはひ、有様」が「帝の御女」として相応しいと「限りなく見」てはいるが、女一宮の全てに満足しているわけではない。それは、女一宮描写がそのまま女君の美質を述べる以下の場面に続いていくことから読みとれる。

「(略) かやうに、いと気高く、静やかにあらず、いとまことにうつくしう、たをやかなるけはひ、有様の、似るものなきはや」と、うち思ひくらぶるに、心地うち騒ぎて、「いづれとなく、うはべをつくるひわたいしこそ、心のうちはのどかなりしか。かき絶えて、年ごろ経しをりもありしを、我が心も、いとうちつけに、今の間のほども面影に見え、心地にしみて、何事を言ひ、世をいかに苦しううち思ひ乱れて、臥いてやあらむ、居てやあらむ、我を待ちやすらむ、『今宵はよも』と、思ひ離れて寝やしぬらむ」とのみ、心地も浮きとおもほゆるに、さりとて、「今宵さへ出でむをば、いかがおもほし、人も見思ふべき」と、思ふかたも、やんごとなさの、おろかなるやうもなし。「我が身は、いみじう苦しからむずるわざかな。こなた、かしこしとて、かの人の心に、つゆも恨めしと思はれて、はた、世にあべうもあらずは」と思ひ寄るより、涙は、ただこぼれてにこぼれて、人目もつつましきに（巻四・342）

男君は、大君と女一宮を室としていた頃は「いづれとなく、うはべをつ

くろひわたい」て、楽だったと振り返る。同様に「いづれも、いと深くはあらず、なのめなるを、目やすくもてなすこそ心の中はやすらかなりしか（巻四・396）」と往時を振り返るが、これは、大君・女一宮双方への愛情がそれほど深いものではなかったことを示す。現在、心を分けることが苦しいのは、女君に深い愛情を持ちながら、女一宮を大切に扱わねばならないからであり、愛情という面で女一宮を女君と比肩しうる存在と認識しているのではない。結局、男君は何も語らない女一宮に言い訳をして女君のもとに向かうのである。野口元大氏が「女一宮は、この間、一言も口をきかず、身じろぎ一つしないかの趣である。女一宮が存在するというそのことだけで、内大臣はかくも振り廻されざるをえないのである。描かれないことによって、逆にこの上ない存在感を印象づける女一宮の特異なあり方に注目する必要がある」とされるように、女一宮自身はほとんど登場せず、むしろ描かれないことで「やむごとない内親王としての存在を強く意識させている」¹⁸⁾。

三 女一宮の病と男君の愛情

ほとんど登場することのなかった女一宮が頻繁に描かれるようになるのは、巻四の中程、病を得てからで、以降、存在の大きさも増していく。女一宮の病は、女君の生霊が原因と噂され、女君は懊悩するが、男君の女一宮への待遇が世間体を気にするだけではなく、愛情に根ざしたものであったことも、病を機に語られるようになる。

おほかたの人目のみにもあらず、我が御心にも、むなしうならせたまはむを見たてまつらむ嘆きも、なのめなるべうもあらず。我が御心にも、さまざま御祈りやなにやと、心の隙なく、つと添ひさぶら

ひたまひて、心のままなる御紛れもしたまはぬ(巻四・370)

男君は女一宮の死を全く望んでいない。大皇宮の存在に隠れて、表だて語られることのなかった女一宮は、男君にとって今まで語られてきた以上に大きな存在だったことが知られるのである。女一宮が人事不省に陥ると、「殿は、まして、いとあわたたしき気色(巻四・373)」「ものおぼえざりつる殿の御心地(巻四・375)」という慌てぶりで、さらに、

御髪は、こちたくきよらにて、九尺ばかりおはしますを、結いてうちやられたり。もとも、気高く、をかしげにおはします人の、いたく弱りくづほれたまへるは、「かくてこそ、なかなかあはれげにおはしましけれ」と見たてまつるに、をかしう、かなしきかたは、おろかならず見たてまつりたまふに(巻四・381)

と、気高い女一宮が病中にあるか弱さを、男君は美しく愛しいものと感じている。こうした男君のさまは、『源氏物語』の葵上に対する源氏の様子と共通する。葵上には

白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うちちたきをひき結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、

いかがあはれの浅からむ。(葵・②39)

と、出産間近でおかつ物怪に悩まされている葵上に、源氏が深い愛情を寄せる場面が描かれる。女一宮の病の原因が女君の物怪と噂されたことも、六条御息所の生霊によって悩まされた葵上を想起させる。葵上は物怪により命を落とすが、女一宮の病は小康を得、その後、女君・男君

双方にとって無視できぬ存在として、第四部まで登場し続けることとなる。なお、女一宮の髪は「九尺ばかり」とあるが、髪が美しかったと記される『源氏物語』の末摘花は「九尺余ばかり(蓬生・②341)」であり、この描写は特筆に価する女一宮の外面的美点ととらえてよいだろう。⁽¹⁹⁾また、病状の思わしくない女一宮に対して、

宮におはして、見たてまつりたまへば、つねの御苦しげさにて、まだいと心苦しげに見たてまつるも、またいとほしく胸ふたがりつつ、御かたはらに添ひ臥したまひて、「いかなれば、かくのみ心をば尽くさせたまふぞ。心憂く」と、御手をとらへて、御顔に涙を落としかけたまひても、いといたう思ひ乱れたまひつる人(女君)の気色、琴の音、ひとりごたれつる言など、耳につき、面影に見え、

「世に苦しかるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ。いづれも、いと深くはあらず、なのめなるを、目やすくもてなすこそ心の中はやすらかなりしか。こなたは、人の御程いとやんごとなく、かたじけなきも、おろかならず、かれはた、年ごろ思ひまどひ、心を尽くししに、にはかに暇あるときの、いかでよろしからざらむ。さも苦しき心のうちかな」とうち嘆かれつつ、身に添ふ魂もなき心地に(巻四・395)

と、男君が強く愛情を感じている場面がある。前掲したように、久しぶりに女君との逢瀬の機会を持った男君は、「こなた(女一宮)、かしことでも、かの人(女君)の心に、つゆも恨めしと思はれて、はた、世にあべうもあらずは(巻四・343)」と、女君と女一宮とが愛情面において対等ではないことを述べていた。しかし、病中のか弱い女一宮の様子を見るにつけ、「世に苦しかるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ」と、現在では女一宮と女君に心を分けることを辛く

感じているのである。男君の心内における女一宮の存在の大きさが、時とともに増してきていることが判る。

生霊事件は、女君の生霊を全く信じず、女君を氣遣うゆえに噂を女君に告げない男君と、男君が噂を気にするが故に秘密にしたと理解した女君との微妙な心のすれ違いが描かれる、第三部の重要事件である。この事件における女君・男君の心内については先行諸氏による言及も多い。しかしそれだけではなく、生霊事件の発端となった女一宮の病を境に、男君の意識の中で女一宮が大きくなっていることも読みとることが出来る。女一宮は病を得て後、男君にとっての愛情の対象としても描かれるようになった。

四 隔意を持たない男君

生霊の噂に苦しむ女君は広沢に移り、出家を願うようになる。女君の出家を止めるべく広沢に向いた男君は、入道に今までの経緯を語る。父入道に男君とのことを知られ、かつ妊娠も明らかとなった女君の帰京は必然となる。以下は、男君が女君とのことを女一宮に説明する場面である。

〔大皇宮ノ妬ミハ〕はた、大臣の御身に苦しかるべくもあらねば、宮ばかりにぞ、おぼしめさむところ心苦しくて、「これは、今始めたることにもはべらず」とて、もとよりありしさまをくはしく語り聞かせたてまつり、さまざま、「(男君のことは、略)」と、こまやかにきこえさせたまへば、御心ばへばかりは、いと気高く、あらまほしく、あてはかにうるはしきところつきたまひて、いみじくおぼすとも、なほなほしき御物恨み、気色など見えさせたまふべくもあ

らず、母宮の御心には、いとたとしへなく重りかにおはしまいで、「今よりなりとも、悪しかべいことにもあらぬを、心よりほかに、聞きにくき、苦しく」とばかり、言少なに答へさせたまひたる御けはひ、有様、いみじくめでたし。御心ばへ、けはひの気高さ、手うち書きたまへるさまは飽かぬことなく、「我が契り、宿世、口惜しからざりけり」と思ひ送らるるを、大皇の宮のあまりなる御もてなしに従ひ、心よからぬ御後見どもの物言ひ、心ばへぞ、いとむつかしく、「など、せしわざぞ」とおぼゆるをりをり多かりける。(巻五・478)

男君は女一宮に、女君との「もとよりありしさまをくはしく語り聞かせ」た。この告白は男君の立場からの物言いであり、また都合良く改変されている部分も認められるから、全面的に信用するわけにはいかない。しかし、女君とのことを詳しく語ったということは、男君が女一宮に対して隔意を持たないことをあらわしている。隔意の有無は、相手に対する信用・愛情の度合と深く関わるから、男君が誠意を持って女一宮に接していることが理解される。『源氏物語』には、薫が浮舟の引き取りについて女二宮に了解を求めたことが描かれ、当該場面と共通点があるが、薫は女二宮に「物語など聞こえたまひてのついでに」、「なめしともや思さんと、つつましながら(浮舟・⑥161)」と断った上で浮舟のことを切り出した。薫の話は「さすがに年経ぬる人のはべるを、あやしき所に棄ておきて、いみじくもの思ふなるが心苦しさに、近う呼び寄せてと思ひはべる。昔より、異やうなる心ばへはべりし身にて、世の中を、すべて例の人ならで過ぐしてんと思ひはべりしを、かく見たてまつるにつけて、ひたぶるにも棄てがたければ、ありと人にも知らせざりし人の上さへ、心苦しう罪得ぬべき心地してなむ」と、自己弁明に終始したものであつ

た。薫と男君との人間性は異質なものだから、単純には比較できないが、「もとよりありしさまをくはしく」「さまさま」「こまやかに」女一宮に語った男君は、「内裏になど、あしざまに聞こしめさする人やはべらむ（浮舟・⑥162）」と、女二宮の父帝の思惑を気にした薫と、同列には扱えないであろう。男君は「宮ばかりにぞ、おぼしめさむところ心苦しくて」とあるように、女一宮の思惑を気にしたのである。

さらに『狭衣物語』で、狭衣が妻一品宮に隔意を持ち続け、実娘飛鳥井姫君のことも、宮の姫君との結婚や引き取りのことも一切語らなかつたことと比べると、男君の女一宮への誠実な対応が明らかとなる。

饒舌に語る男君に対して、女一宮は「言少なに答」えた。女一宮が寡黙であったのは「いみじくおぼすとも、なほなほしき御物恨み、気色など」を見せるのを良しとしないからで、何も感じないからではない。女一宮は、男君が女君のもとへ公然と通うことを辛く感じ、苦しむ。

宮も、いかでかは、さのみものをおぼし知らせたまはざらむ。後の宮のいみじきことども書き尽くせたまへる御文どもを、御覧するに、「人やはずらき。昔より、かかる本意深き人とは聞こえき。また、え去らず添ひたる人ありしを、あながちにおぼし寄りもてなさせたまへる怠りにこそあめれ」と、人やりならず心憂くて、おぼし乱れたる御気色、いともいともことわりとも世のつねなれども、いかがはきこえむ。（巻五・505）

大皇宮は、大君について「あの姉は、もとより心ざし深からで、ありつかずと聞きはべり（巻三・265）」と、男君との不仲を語っていたが、女一宮自身は大君を「え去らず添ひたる人」と認識し、降嫁を「あながち」ととらえていた。独身を通すことの多い内親王の慣例に従っていれば、女一宮は男女間の愛憎に悩まされることなどなかったはずである。

第二部で女一宮がどれほど描かれていたのかは不明で、降嫁に対する女一宮本人の思いは全く描かれていなかったとも思われるが、大君という妻が存在した男君に降嫁した女一宮は、現在、女君と対峙しながら、降嫁を「怠り」だったと感じている。責任を他人に転嫁することなく、現状を把握する聡明な内親王として造型されているといえよう。しかし、女一宮は自分の不快を男君に訴えることはしない。

なほなほしく言に出でてのたまはぬ御心ばへ、気色は、いみじく思ふさまに、うれしくめでたく、なかなかかかるといふも、重りかにかたじけなきことまさるやうにおぼえたまふものから、重りかになるかたも過ぎて、あまりいとうるはしく、我が怠り言ひどころなくおはしますにぞ、我も言少なになりて（巻五・508）

前掲箇所では女一宮の「言少なに答へさせたまひたる御けはひ、有様」を「いみじくめでたし」と評していた男君も、寡黙な女一宮を前にして自ら沈黙せざるを得なくなる。女一宮の気高いさまは幾度も記されるが、自然と相手を圧倒してしまう高貴さを女一宮が有していたといえよう。男君と女一宮とがうち解け合うことはない。

なほさべき御答へはあるべきを、ただうち背きておはします。「宮たちは、ただかうぞ、事もなく、あてにおはしますべきぞかし」と、本意ある心地するものから、あまりさうざうしきも、ものをおぼし知らせたまはぬにはあらず、あくまで心深く、気高きの過ぎさせたまひて、何事も世づいて答へむは、うたておぼしめすべし。おぼろけならでは、差し向かひきこえたまふこともなきを、かしこまりおきたてまつりたまひて、いたくうちとけては馴れ申したまはずなどぞありける。（巻五・509）

男君は、女一宮の態度を、これこそ皇女と思う反面、夫として物足りな

くも感じている。高貴な女性が夫にうち解けなかったことは、『栄花物語』巻十二に藤原頼通室の隆姫女王が「つねよりも心よう御物語聞えたまふに、心とけたらぬ御答へを、例のことながら(2)56」という描写からも理解される。隆姫女王は具平親王女だから、身分的には内親王と比較にならないが、貴顕特有の寡黙な高貴さは欠点ではない。むしろ評価すべき美質ととらえるべきは、その内親王としてのものである。当然の高貴さが、夫としての男君には物足りなく思われるのである。かつて「いと気高く、もの遠きさまして、御けはひもうるはしく重りかのみおはず(巻一・62)」と評された大君に男君が不満を感じたのと同じであろう。もし、女一宮の全てが男君の心をとらえるものであったならば、男君が女君に愛情を感じる必然性もなくなる。それでは男君と女君の物語は終わってしまう。一方に内親王という高貴な正妻を持ち、且つ女一宮自身にも心惹かれながら、女君に深い愛情を感じるこそが、物語の要請した男君だったということだろう。男君は女一宮だけで心満たされてはならないのである。そのために女一宮に物足りなさをも感じること必要となったのだろう。

帰京後、男君は、女一宮に二夜、女君に一夜と通うようになる。

〔女君ノ〕なだらかなるはうれしなから、例には違ふ心地して、静心もなく思ひながら、世の聞き耳ことわり失はぬ御心にて、宮の御方に二夜、こなたに一夜と、なよ竹のほどには過ぎたる御もてなしをも、大皇の宮、御乳母どもは、飽かずめざましきことに、尽きせず許しなきを、大臣は、「あまり、こはなぞ。片時横目すべくもあらず、年月を経て恋ひわびわたりつるも、誰ゆゑならむ。我なればこそ、せめて思ひ忍びてあながちにはもてなせ。ただ心を心とせむ人は、帝の御女といふとも、あながちに心を分けじものを」とぞ、

あまりには、むつかしくおぼさる。(巻五・511)

自分以外の男ならば、皇女であっても心を分けな思っていることなどから、男君の女君への愛情の程が伺われる。しかし、男君が心外だと感じるのは、大皇宮や乳母の態度であって、女一宮自身ではない。女一宮に「二夜」、女君に「一夜」通うのは、「世の聞き耳ことわり失はぬ御心」ゆえではあるが、先行物語と比較しても、男君が女一宮を重く扱っていることが判る。後に「ただなるをりは宮がちにこそ(巻五・523)」と男君が述べるように、女一宮が疎略に扱われることはない。

女君に深い愛情を感じている男君にとって、女一宮が男君の心を独占することはない。しかし、男君の女一宮への想いは、当初語られていた以上のものであり、愛情の面からも、世間体からも、男君が女一宮をなすがしろにすることはないのである。

五 一品内親王

女君の出産が近づくと、男君は「宮ばかりには、いと心苦しく語らひきこえさせたまひつつ、暇きこえたまひて(巻五・523)」、身重の女君に付き添った。第一子(石山姫君)・第二子(まさこ君)に続いて、男君との間の第三子(男児)が誕生し、男君と女君との間もいったんは落ち着いたかに見える。しかし巻五の巻末近く、女一宮は再び「やむごと」い存在として、男君・女君の双方からとらえなおされる。男君は女君との関係を回顧しながら「我が世にはた、内々こそつゆ分くるかたなくしみ返りたれど、たちまさり、やむごとなき人を並べて、様よきほどにもてなしたる(巻五・527)」と、女一宮の存在を忘れてはいない。男君にとって女一宮の存在は当然のものとなっている。女君にどれほど

愛情を感じようとも、男君は女君一人を妻として守るわけではない。

一方の女君も、男君の処遇に満足したわけではなかったが、自身の三人の子をはじめ、老閨白の遺児や小姫君と、多くの子供の世話に「心の隙」がなく、「ものの恨めしさもあはれも、おぼろけならでは心もとまべくもあらず(巻五・513)」、一種の精神的安定を得る。そのような中、自身の置かれた立場を振り返り、

「人(≡男君)の御心はかばかりこそはあらめ。恨めしき節やは、つゆもまじる。やむごとなき片つかたの立ち並び、やすげなきは、我が身の契りの憂きがおこたりにこそあれ」(巻五・530)

と、女一宮を以前と同様に「やむごとなき片つかた」と認識している。男君との間に子供が何人生まれようとも、男君の正妻は女一宮であり、その存在が揺らぐことはない。かつて、入道も

内の大臣(≡男君)、本意深き御気色なめり。いとげにすぐれたる人がらといへど、さばかりやんごとなきさまに定まりて、いみじくとも、そなたのおろかなるべきやうなければ、劣りさまにては、言ふべきことにもあらず。(巻五・437)

と、女君を女一宮に比して「劣りさま」と評していた。つまり、男君の愛情や子の有無に関わらず、対外的に見れば、女君は「劣りさま」でしかなく、女一宮は、「やむごとない正妻として存在し続けるのである。男君も女君もそれを当然のこととして受け入れている。

女君は第四部で第四子(≡女児)を出産したと推定されるが、女一宮が男君の子を産んだということは現存諸資料からは伺えず、子を産まなかった蓋然性が高い。子を産まない正妻としての女一宮が、第四部でどのような役割を果たしたのかは不明だが、その一端を示す資料が『物語二百番歌合』中の『後百番歌合』(十二番右/姉上)である。⁽²³⁾

『夜の寝覚』の女一宮 高橋由記

閨白(≡男君)、一品宮にまゐりそめたまひける日、思ひ嘆きたまへるを慰めて、「よしや君長き契りは絶えせじを命のみこそ定めがたけれ」とはべりければ

224 たえぬべき契りにそへて惜しからぬ命をけふに限りてしかな

この歌は『無名草子』にも「大将、女一の宮へ参りたまふ折、姉上(227)」として入っており、『後百番歌合』の詞書にある「一品宮」が女一宮を指すことが判る。女一宮が第二部から一品であった可能性もないわけではないが、現存部分において女一宮を一品宮と称することはなく、第四部において叙された蓋然性が高い。⁽²⁵⁾ 史実において一品に叙された親王・内親王は少なく、女一宮は社会的にますます重きをなす存在となつたと思われる。第四部においても、女一宮は「やむごとない存在として描かれたであろう。とともに、男君にとっては愛情の対象でもあったことも想像に難くない。

おわりに

降嫁した内親王の、物語における存在意義の考察として『夜の寝覚』の女一宮を取り上げた。『無名草子』に「はじめより、ただ、人ひとりのことにて、散る心もなく、しめじめとあはれに、心入りて作り出でけむ(224)」と記されたように、女君の心内を深く描く『夜の寝覚』において、女一宮の存在が女君にもたらした影響は大きい。后宮所生内親王と比較し、女君は自身を幾度となく「劣りさま」と感じている。女君の美質がどれほど優れていても、女一宮に対する劣性意識は変わることはない。

当初、高貴な出自のみが強調され、男君・女君双方から「やむごと

「な」い存在としてのみとらえられていた女一宮は、病を機に愛情面からも男君の心内で確固たる位置を占めた。女一宮の物語における存在意義は、物語の要請に従って次第に大きくなったといえる。世間的にも重きをなす女一宮の存在は、第四部においても女君を苦しめたであろう。

改作本では齋院卜定によって降嫁が回避されたため、女一宮自身の描写は余りにも少ない。皇女降嫁の波紋としてもたらされた大君の死のみを物語内に取り込み、それ以後の女君の懊悩を描かず幸福な結末を迎える改作本にとって、女一宮降嫁はあってはならない出来事だった。つまりは、それほどまでに、原作における女一宮の存在意義は大きかったということであろう。

注

- (1) 皇女・内親王の数は資料によって若干の違いがあるが、今井源衛氏「女三宮の降嫁」(『改訂版源氏物語の研究』未来社 一九六二・七)によると、平安初頭より一条朝以前までの皇女(賜姓源氏を含む)一六四名のうち、配偶者を持つ皇女は二五名で、そのうち臣下に降嫁したのは一二名。
- (2) 『無名草子』の本文は、久保木哲夫氏校注・訳 小学館 新編日本古典文学全集による。()内は、ページ数。
- (3) 『夜の寝覚』は中間と末尾に欠巻のあることから四部に分けて把握するのが通説となっている。以下、本論でもそれに従う。
 第一部—巻一・二(三巻本では上巻)
 第二部—中間欠巻部分
 第三部—現存巻三〜五(三巻本では中・下巻)
 第四部—末尾欠巻部分
- (4) 改作本『夜寝覚物語』で大君が産むのは男児。
- (5) 野口元大氏「第三部における人間の認識 三、生霊事件——自恃の崩壊——」『夜の寝覚 研究』笠間書院 一九九〇・五所収、初出『寝覚』の女君——生霊事件の再検討——『文学』五三号 一九八五・四)
- (6) 原作と改作本における女一宮の役割については、渡辺純子氏『寝覚』の女一の宮——原作・改作における役割——『大妻女子大学大学院大学研究科論集』九号 一

九九九・三)がある。

- (7) 『夜の寝覚』の本文は、鈴木一雄氏校注・訳 小学館 新編日本古典文学全集による。()内の数字はページ数。私にことばを補い、人物に注を付した。
- (8) 注1参照。
- (9) 皇女が再嫁した場合の再嫁先は例外で、受領階級。(安藤太郎氏「朱雀院女三宮の準拠と女二宮——源氏物語第二部の一考察」『国文学 言語と文芸』八〇号 一九七五・六)。
- (10) 後藤祥子氏「皇女の結婚——落葉宮の場合」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 一九八六・二)
- (11) 参考として、以下に平安朝で臣下に降嫁した皇女(内親王・賜姓源氏)の一覧を載せる。『本朝皇胤紹運録』『系図纂要』『一代要記』などを参考にした。

名	生没	父帝	母	配偶者	生没	結婚時期	裁可
源潔姫	810-56	嵯峨	当麻氏	藤原良房	804-72	父帝在位中	○
某①	不明	光孝	不明	藤原時平	871-909	不明	不明
源順子	885-925	宇多	女御菅原衍子	藤原忠平	880-949	父院在世中	○
源某②	?-986	不明	不明	藤原実頼	900-970	不明	不明
勤子	904-38	醍醐	更衣源周子	藤原師輔	908-60	父帝崩後	×
雅子	909-54	醍醐	更衣源周子	△藤原敦忠	906-43	父帝崩後	×
普子	910-47	醍醐	更衣満子女王	源清平(光孝孫)	877-945	不明	不明
靖子	915-50	醍醐	更衣源封子	藤原師氏	913-70	父帝崩後	×
韶子	918-80	醍醐	女御源和子 (光孝皇女)	源清隆 (陽成皇子)	884-960	父帝崩後	○
康子	919-57	醍醐	中宮藤原穩子	藤原師輔	908-60	父帝崩後	×
保子	949-87	村上	更衣藤原正妃	藤原兼家	929-90	父帝崩後	×
盛子	?-988	村上	更衣源計子	藤原顕光	944-1021	父帝崩後	×
当子	1001-23	三条	皇后藤原城子	△藤原道雅	992-1054	父院在世中	×
禊子	1003-48	三条	皇后藤原城子	△藤原頼通	992-1074	父帝在位中	○
娟子	1033-1103	後朱雀	皇后禊子内親王	藤原教通	996-1075	父院崩後	○
				源俊房	1035-1121	父帝崩後	×

★「某①」は『扶桑略記』延喜九年(九〇九)四月四日条に、「源某②」は『日本紀略』承平六年(九三六)四月某日条による。

★「裁可」は、降嫁に当たり帝・院等の許可があったかどうかを示す。結婚後に容認されたものは含めない。

★「△」は降嫁・結婚が実現しなかったものを指す。雅子と敦忠は「今日明日あひなむ」(『大和物語』九三段)という状態だったが、雅子が承平元年十二月に齋宮に卜定されたためにそのままとなった。当子と道雅は密通の噂が立ったが三条院が許さず、二人の中は絶たれた。

(12) 男君が女一宮に近づいた理由については、他にも「この人(女君)ゆるこそ、もし嫉捨ならぬこともやと、思ひ寄りきこえさせしか(巻四・423)」「慰むこともやと思ひ寄りし(巻五・503)」「思ひわび慰むやとてなびきしに晴れずまよひし蜂の白雲(巻五・504/男君の詠)」と同様の記述が見られる。

(13) 『源氏物語』の本文は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男氏校注・訳 新編日本古典文学全集による。()内の丸数字は新編全集の巻数、数字はページ数。

(14) 降嫁にあたり、女一宮の父院や兄弟がどのような態度を取ったのかは明らかではない。しかし巻四では、病となった女一宮が父院のもとに所替えしており、有事において女一宮を支える存在として描写されている。父院の許への所替えは、男君にとって女一宮の社会的立場の重さを示す無言の圧力となったであろう。また、現存部分には兄弟と女一宮の交流は描かれていないが、女一宮が一品に叙されたのは第四部と思われ、兄弟の治世下であった蓋然性が高い。

(15) 女一宮の病の際に、大君と思われる物怪があらわれたのを、男君は「ことわり。今ほの際まで、いみじう心置き、この宮(女一宮)により恨みをとどめてしかば、さもあらむ(巻四・382)」と納得している。また「姉君の命をさへ厭ひ捨てたまひてし例(巻五・438)」と、大君の父入道が女一宮の存在を大君の死と結びつけて回想している。

(16) 野口元大氏「第二部におけるヒロインの運命と変貌 二、運命の自覚と人間的成長」(『夜の寝覚 研究』笠間書院 一九九〇・五所収、初出『寝覚』の女君——左大将家北の方から関白家北の政所へ——『文学・語学』九七号 一九八三・四)

(17) 注5と同じ

(18) 第二部での女一宮描写がどれほどのものであったのかは不明である。改作本では、女一宮の降嫁が取りざたされた際に、大将殿の上(大君)は「やむごとなき御ことなれば、せきとむべきかたもなし(巻三・466)」と嘆き、関白殿の北の方(女君)も「女一のみやの御事は、やむごとなき御事なれば、おろかならじ(巻三・467)」と、

女一宮を「やむごとなき」存在と置いていた。おそらく、第二部における女一宮も、直接描写されるよりも、「やむごとなき」存在として描かれていたであろう。(『夜の寝覚 物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成』第六巻 笠間書院 一九九三・五による。()内はページ数。)

(19) 『うつほ物語』の尚侍(俊蔭女)も「後ろ向き給へる御髪、整しかけたるごとくして、九尺ばかりあるを繰り出で給へれば、一御座広がりて、いとめでたし。(蔵開中・569)」と描写される。『うつほ物語』の本文は、室城秀之氏校注『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう 二〇〇一・一〇)による。()内の数字はページ数。

(20) 長南有子氏は「彼女を黙らせたもの、それは女一宮の内部にあって自身を形成し、その根底を形造る「内親王としての在り方」とも言うべき自己規制であった」と述べられた。(『夜の寝覚』の女君たち——沈黙の意味するもの——『緑岡詞林』二三号 一九九九・三)

(21) 『栄花物語』の本文は、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進氏校注・訳 新編日本古典文学全集による。()内の丸数字は新編全集の巻数、数字はページ数。

(22) 『うつほ物語』で、仲忠の父藤原兼雅は、「一月を、二十五日は、こなた(尚侍)、今五夜をば、宮の御方(女三宮)・この対(宰相の上)などには通」っていたが、仲忠は「こなた(尚侍)に十日、宮の御方に十日、今日を三所(楼の上・844)」とするように進言した。また左大臣源正頼は「宮(大宮)・大殿(大殿の上)、いと麗しくこそ、十五夜づつ(楼の上・845)通っていたことが尚侍のことばから判る。『源氏物語』の夕霧が「丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住(匂兵部卿・20)」んでいたことは有名。

(23) 歌は、新編国歌大観による。但し、私に漢字を宛て、句読点を付した。

(24) 『無名草子』では、二句は「契りに代へて」

(25) 関根慶子・小松登美氏『増訂寝覚物語全釈』(学燈社 一九七二・九)の「中間ならびに末尾欠巻について」でも、「(女一宮ハ)末尾欠巻で一品に進まれたらしい」とする。

(26) 安田政彦氏「一品親王」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館 一九九八・七所収、初出「八・九世紀の一品昇叙」『日本歴史』五七五号 一九九六・四)。